

妻がある時から奇声を発するようになった。「キツキツ、キツキツ」と大きな声で、それもどこか彼方に目を泳がせながら何度も「キツキツ、キツキツ」と。これはまずいと動揺したが、本人はどうやらアカゲラと会話をしたがっているようだ。それ自体も怪しい行動なのだが、その気持ちもわからなくは無かった。妻はアカゲラにも名前をつけていた。「ぼんちゃん」という。名前の由来はアカゲラが飛ぶ時の姿で、始終羽ばたいているのではなくバタバタと数回羽ばたいた後は羽をたたくように進むのだ。その姿を言葉で表すと「ぼーん、ぼーん」と飛んでいるように言うのだ。それでも毎回同じアカゲラが来るわけではなく、頭のとつぺんが赤い雄と、黒いままの雌がいるし、明らかに体格が違うのも来る。でもそれはみな「ぼんちゃん」で、雄のぼんちゃん、大きなぼんちゃん、で済ませている。まあ、それはそれで良いのだけれど、それだけ思い入れたうえ、季節を問わず家のすぐ近くまで来てくれるとなると、話してみたくなる。どうもこちらも洗脳されたのか、妻が「キツキツ、キツキツ」と言うと、ぼんちゃんも「キツキツ、キツキツ」と返してくるように聞こえる。何を言っているのか妻に聞くと「脂身はまだですか。」だと。まあ、それは確かかもしれない。

それから妻はアカゲラについていろいろ知りたくなって図書館でいろいろな本を借りて来た。その中の一冊を差し出して「これ見て」と言われたのが、アカゲラの舌の図解だった。アカゲラは頭を激しく振って尖った嘴で木に穴を空けるのだが、それで脳を痛めることもあるようだ。それだけ必死に穴を空けた後、中にいる虫を食べるのだが、そのために特殊な舌を持っているのだ。舌の先は釣り針の返しのようにフックできるように曲がっていて、その舌を長く木の穴に差し込んで虫を食べるのだそうだ。その長く舌を出すための機構として長い舌を鼻から後頭部をぐるっと回るように収納しているのだ。確かに、アカゲラが脂身を取り出すところをアップの動画で写したことがあるが、それはまるで爬虫類の舌だった。アカゲラは「きもかわいい」のだ。

妻の話し相手はアカゲラだけではなく、ヒヨドリもそうだ。ただ、ヒヨドリの鳴き声は「ギーツ」とか「ヒーツ」なので、さすがに大声で会話するのははばかられるようだ。ヒヨドリはなんとやっているのか聞いてみると「リンゴはまだですか。」だと言う。同じじゃ無いか。まあ、それ以上に高等な会話をする必要が無いのかもしれないが、ヒヨドリといえば、東京などの大都市でも始終良く見かけるが、もともとは森と平地を季節ごとに行き来していたようだ。それが一九七〇年頃をさかいに年中まちなかにいるようになったようだ。なぜそうなったかには諸説あるようだが、餌に不自由しないし、人は天敵にはならなかったからという説がある。竹山で見られるヒヨドリも通年で見られるので同じように生態が変わってしまったているのかもしれない。ただ、東京の都心での鳴き方は非常に強く威嚇的に「ギャーッギャーッ」鳴きあっていたが、ここではストレスが少ないのか会話的な鳴き方をしてるように感じる。

